

## 本間長世著『アメリカ大統領の挑戦—— 「自由の帝国」光と影』

(NTT出版、2008年)

中山俊宏

本書は、著者自身が「アメリカ史物語三部作」と呼ぶシリーズの最終巻である。<sup>1)</sup> 前二巻は、それぞれエイブラハム・リンカーン、ジョージ・ワシントン両大統領を軸に、最終巻の本書はウッドロー・ウィルソンとフランクリン・D・ローズヴェルト両大統領を通して、それぞれの時代のアメリカが直面した逆説や矛盾に着目しつつ、ひとつの「物語」としてアメリカをあらためて語ろうとする試みである。

ここで語られる物語は、前衛劇のように、主人公もプロットもなく、ただただ漂っている小状況の連鎖ではなく、はっきりと主人公がいて、大状況もあり、人間の意志が（常に思い通りにいくということではないにせよ）意味をもつ世界の中で成立している。「個」を構造の網の目の中で成立する「偶然」とみなす最近の潮流に対して、著者は敢えて「個」を中心に据えた物語の語り手たらしめている。しかし、ここで語られる「個」も実は脇役に過ぎない。本シリーズの主人公はあくまで「アメリカ」であって、登場する大統領たちは（著者がかつて用いた言葉を借りれば）「一種の観念性ないし抽象性を漂わせ続けているアメリカ」<sup>2)</sup> に具体性を与える舞台道具に過ぎない。本シリーズの二巻目にあたる『共和国アメリカの誕生』に関し古矢旬氏が鋭くも指摘しているように、本シリーズはアメリカをひとつの物語として再構成しようとする「大きな物語への意志」に支えられている。<sup>3)</sup> この姿勢は、このシリーズを貫いている著者の基本姿勢といっても差し支えないだろう。

なぜいまさら「アメリカ」を語る必要があるのか。「アメリカ」を語ることなど、そもそも可能なのだろうか。長年、日本におけるアメリカ研究を支え、方向性を示してきた著者の該博な知識と見識が、この壮大ともいえる試みに安定感を持たせていることは間違いないだろう。この安定感ゆえに、このシリーズを一般読者向けにアメリカ史を平易に説いた、教科書的（＝退屈）ではない良書として受容してしまいがちである。本書は、赤ペンを片手に線を引きながら読まなくてもいい本、つまり個々の情報が物語として記憶に沈殿していく質の高い一般書であることは間違いない。<sup>4)</sup> しかし、著者の意図したのはたしてこうした啓蒙書の執筆だったのだろうか。評者にはそうとは思えない。巻末のきわめて

<sup>1)</sup> シリーズ第一巻が『正義のリーダーシップ—リンカーンと南北戦争の時代』（NTT出版、2004年）、第二巻が『共和国アメリカの誕生—ワシントンと建国の理念』（NTT出版、2006年）、そして第三巻が本書にあたる。

<sup>2)</sup> 本間長世『理念の共和国』（中公叢書、1976年）、まえがき。

<sup>3)</sup> 古矢旬「書評—『共和国アメリカの誕生—ワシントンと建国の理念』」『アメリカ太平洋研究』第7号（2007年）、160頁。

<sup>4)</sup> 岡山裕氏は、本書を「（初学者でも）『わかった』という感覚を得られる」書と表現している。岡山裕「Book Review—本間長世『共和国アメリカの誕生』『正義のリーダーシップ』『アメリカ大統領の挑戦』」『論座』（2008年9月号）、313頁。

短い抑制された「あとがき」において、著者は本シリーズを構成する三冊が、それぞれ2004年の大統領選挙（『正義のリーダーシップ』）、2006年の中間選挙（『共和国アメリカの誕生』）、そして2008年の大統領選挙（本書）が行われた年に出版されたのは、自分の中では偶然ではないと述べている（271頁）。

21世紀初頭のアメリカは、著者がいままで見てきたアメリカとは対極の存在、より正確に言えば、アメリカの悪い部分が最良の伝統を押しつける形で突出しているような状況にあり、これに対してなんらかの発言をしなければならない、そのような切迫感をもって書かれたのが本書ではないか。つまり、本書を、単に啓蒙書としてではなく、時代状況にひとつの言葉（＝行為）として投入された書であるということを念頭に読み解いていくと、ひとつひとつの仕掛けやエピソードの選択の意味がよりはっきりと見えてくる。しかし、実はこのことは著者自身が「あとがき」で述べていることでもある。著者は、「ブッシュすなわちアメリカではない——アメリカは確かにブッシュを生んだけれども——というメッセージを伝えたかった」（272頁）とはっきり述べている。本文中でもジョージ・W・ブッシュ大統領に対する辛辣な批判が、本書執筆時に彼が大統領であるという以外には特に理由が見当たらないような文脈で唐突にたびたび登場する（時にそれはブッシュ大統領／政権というよりもジョージ・W・ブッシュという個人に対して向けられたものと思わずにはいられないものもある）。

評者が、本書を「時代状況に投入された書」と感じるのは、実はブッシュ批判のくだりとはまったく関係ない。むしろ、ブッシュ批判は、本書のリズム感の良さを時に妨げていると思わせることさえあった。本書を読みながら、ハッとさせられたのは、本書が執筆されていた頃はまだ泡沫候補に過ぎなかったであろうバラク・オバマ候補が、多くの専門家の予想を裏切るかたちで、しかもこれまでの政治的構図を大幅に覆すかたちで勝利した時代状況を説明する際に必要な言葉や概念、そしてエピソードが、本書のいたるところに散りばめられていることに気づいたときであった。それは、いまのアメリカが、20世紀前半の両世界大戦の規模ではないにせよ、出口がなかなか見えない二つの深刻な戦争を戦い、さらに100年に一度と形容される未曾有の金融危機に直面している状況が、本書の主要登場人物の一人であるローズヴェルト大統領が直面した状況と似通っていることとも確かに無関係ではないだろう。ひょっとすると著者の意図とは離れて、本書が現在の状況と意図せず共鳴しあったということなのかもしれないが、それだけでも思えない。この共鳴は著者のアメリカに対するコンパッション、アメリカを総体として把握しようとするその姿勢に根ざしているように思えてならない。いくつか実例を示そう。

さしあたり強く印象に残ったのは「ボーン・アゲイン（再生）」という言葉である。近年は、とりわけジョージ・W・ブッシュ政権が誕生してからは、「ボーン・アゲイン」といえば、「ブッシュの信仰」と同一視されてきた。それは、2004年の大統領選挙で、強い逆風にもかかわらずブッシュ大統領の再選を実現させた福音派を理解する際のキーワードとしてもっぱら語られた。しかし、本書では、この言葉を「アメリカ史全体を通じての、個人・集団・国家にわたってのキーワード」（15頁）として位置づけている。オバマ・キャンペーンのスローガンが「チェンジ」であったことはよく知られている。しかし、潜在的メッセージは一貫して「再生」であった。オバマ・キャンペーンの「世直し運動」的なエネルギーは、単に社会を「変える（チェンジ）」のではなく、「新たに生まれ変わる（ボ

ーン・アゲイン)」という感覚があつてこそのものであった。アメリカ史を貫流する「ポーン・アゲイン」という精神的雛形にオバマ候補の存在は違和感なくはまったといえる。他にも、「ヴァイタル・センター (Vital Center)」という言葉への着目がある (220-22 頁)。「ヴァイタル・センター」は、ジョン・F・ケネディ大統領のブレーンでもあった歴史家のアーサー・シュレジンガー・ジュニアが戦後アメリカのリベラリズムの核心を定めるべく著した本の書名だが、著者はシュレジンガーの言葉を再構成しつつ、単に「中道歩む」という妥協的姿勢ではなく (それではセンターは「死点」になってしまう)、中央より少し左に力を集約させる姿勢と説明している。まさにこれこそオバマ・キャンペーンの真髓ではないか。著者は「ヴァイタル・センター」を、オバマ候補を論じるなかで引いているわけではない。しかし、今日のアメリカ政治の重心がセンターに移りつつあり、そこを活気づけない限り、党派政治に疲れきっているアメリカを動かすことはできないという風景が著者には見えたのだろう。

また、ニューディーラーたちに言及する中で、「連邦政府で働くことが、野心を持つ若者にとって大きな魅力となったことは、やはりローズヴェルトが政治の空気を変えたことを示すものだった」(179 頁) という一節がある。オバマ候補も、決して動かすことはできないといわれた若者たちを動かした。オバマ氏は、ひとつひとつの小さな波紋が大きな変化を引き起こす可能性について語り、そして現にそうやってアメリカは変わってきたのだということを雄弁に訴えかけた。そして、安易なシニシズムに陥りがちな若者たちが、オバマ候補のメッセージには素直に反応した。まさに政治の空気を変えたとしか形容しようがない。いま 9.11 テロ攻撃直後とはまったく別の文脈で、ワシントンで (というよりもオバマ政権の下で) 働きたいという若者が増えているという。

オバマ・キャンペーンといえば、とにもかくにも巨額の政治資金のみが注目されがちだったが、なにをおいてもオバマ氏の最大の武器は言葉だろう。その点は、ウィルソンもローズヴェルトも同じだった。「運命とのランデヴー」、「恐れるべき唯一のことは恐れること自体である」など、単に選対本部が政治的効果を狙って編み出した「キラー・フレーズ」ではなく、国民の心に響き、時代と共鳴する指導者の言葉が、いかにアメリカを変えてきたかを本書でも再三にわたって強調している。「雄弁家で、ラジオを通じてでも聴衆の心をつかみ、明るい雰囲気まき散らすことができたローズヴェルト」という本書の一文を読んで、ブッシュ及びマケイン・キャンペーンで選挙アドバイザーを務めたマーク・マッキノンが若干皮肉まじりにオバマ候補のことを評した言葉を思い出さずにはいられなかった。「彼は歩く希望生産機だよ。彼ならアメリカ政治を変えてしまうかもしれない (He's a walking, talking hope machine, and he may reshape American politics.)」。

他にもいくつかもある。評者にとって、長く続いた 2008 年大統領選挙でもっとも印象に残ったエピソードのひとつは、アメリカの「ユニポラー・モーメント (Unipolar Moment)」を自ら讃え、タカ派を代表する論客であるチャールズ・クラウトハマーがオバマ候補のことを評して、「彼は一級の知性と一級の気質の双方を兼ね備えている (he's got both a first-class intellect and a first-class temperament.)」<sup>5)</sup> と述べたことであつた。このクラウトハマーの発言のもとになったローズヴェルト大統領とオリヴァー・ウェンデル・ホ

<sup>5)</sup> Charles Krauthammer, "Hail Mary vs. Cool Barry," *Washington Post*, October 3, 2008, A23.

ームズ連邦最高裁裁判官とのやりとりもしっかりと本書で紹介されている(157頁)。

そもそもオバマ候補は本書ではほとんど登場しない。しかし、本書中盤過ぎてR・ブルックハイザーの『ワズプ流の仕方』(1991年)からの引用というかたちで、「今日アメリカに残っているワズプだけが占めている職の一つとして、大統領職が(ある)」(142頁)という一節が紹介されるが、この箇所は(著者の意図は別にして)オバマ候補の存在を本書の背後に感じさせる効果をもった(オバマ候補が当選したいま、その効果はよりはっきりと感じられるだろう)。

なお、ウィルソン大統領については、アメリカにおける最も深い政治的伝統である孤立主義を放棄し、戦争には勝利するも、その妥協を許さない理想主義が祟り、挫折に追い込まれた失意の大統領として描かれている。しかしながら「主義(イズム)」という接尾語が、名前につけられ記憶されることになった例は「ウィルソニアニズム」以外にはあまり例がないという(86-87頁)。たしかに他は皆ドクトリン(トルーマン・ドクトリン、レーガン・ドクトリン、ブッシュ・ドクトリン等)で、「主義」がつく例は滅多にない。ウィルソン大統領は、「自由の帝国」との関連で、主として新保守主義の意図せざる源流として言及されているが、果たしてオバマ次期大統領の外交政策が「オバマイズム」と称せられるような刻印をアメリカ史に残すのであろうか。「世界におけるアメリカの役割」という点で、オバマ政権は歴史的な岐路に立っていることは間違いない。また、学者から大統領への経歴を辿ったのはこれまでのところウィルソン大統領だけだというのが(90頁)、オバマ次期大統領もシカゴ大学で憲法を講じ、終身在職権のオファーもされたという。オバマ氏の学者的な気質がどのように展開していくかも興味のあるところだ。

細部に入り込みすぎてしまったかもしれない。本書がオバマ候補の勝利を予感しているとか、選挙が終わってみるとそう読めるとか、そのようなことを云おうとしているのではない。また、本書が「政治的な書」でないのはいうまでもない。ここでの関心事は、オバマ政権の誕生という例外的な状況を説明する際に必要な言葉や概念、そしてエピソードが、どうして本書に散りばめられていたかということである。答えは意外に簡単かもしれない。オバマ政権の誕生は、実は例外的ではなく、むしろアメリカ政治の伝統に連なる言葉で説明できる典型的にアメリカ的な現象ということなのかもしれない。筆者は、最終章で『『ポスト・エスニック・アメリカ』を象徴するようなオバマ候補』の存在について淡々と短めに論じている。オバマ氏の「ブラックネス」に踏み込んでいないことは卓見といわざるをえない。オバマ・キャンペーンでは、外からそういわれた時以外は、オバマ氏の「ブラックネス」が自覚されたことはほとんどなかったという。いずれにせよここで例示したような言葉を迷うことなく拾い上げることのできた著者に敬意を表しつつ、いまアメリカという国を、コンパッションをもって総体として語るることができる識者がどれほどいるだろうかと疑問を感じずにはいられない。

たしかに実際に存在するのは個々の「アメリカ」である。しかし、その個々の「アメリカ」が大きく共鳴し合い、「アメリカ」を総体として語らなければならないような力学が生まれてくるのもまたアメリカという国の特色である。そして、そのような「アメリカ」は必ずしも、「排除」や「支配」といった言葉のみを用いたのでは語りきれない部分があることを本書は改めて気づかせてくれる。